

子ども虐待防止 オレンジリボン運動

令和5年度学生によるオレンジリボン運動実施報告書

実施主体 名古屋学芸大学 別科助産学専攻学生 25名（4期生）

実施内容 子育て支援施設を訪問し、作成したリーフレットを配布

① 事前に取り組んだ内容

1. 地域母子保健学の講義で児童虐待の実態や支援体制について学んだ。
2. 母子と家族の心理の講義で児童虐待を受けた子供や家族への影響について学んだ。
3. 4グループによる乳児用・幼児用リーフレットの作成を行った。

リーフレットは4グループ5人から6人で作成しており、乳児期（1部）と幼児期（1部）の子どもを持つ母親に宛てたものとなっている。子どもの発達やお母さんの心配事にフォーカスしながら、赤ちゃんの揺さぶりや、お母さんの心と体を気遣いながら不安や悩みを抱えないこと、相談できる施設の紹介などが盛り込まれている。子育てしてよかったと思えることが大切、子育てしていて感じる幸せな気持ちを大切にできることなど助産学生としてのメッセージも込められている。

2024年2月に子育て支援施設を訪問する前に作成したリーフレットを手にしてポスターを囲んで全員で集合写真を撮った。



全員で集合（学生25名 教員4名）

② 実施期間に取り組んだ具体的内容

2月に各グループの代表者数人が子育て支援施設を訪問し、来所している母親の話を聞きながらリーフレットを配り説明をした。

<子育て支援施設でリーフレットを配布している様子>

* ところと



* クレヨン広場

* クレヨンパーク



* 子どもケア支援センター



③ オレンジリボン運動を終えて（グループ代表 学生の声）

・お母さん方のお話を聞いて、お子さんが3時間泣き止まなくて毎日昼寝もしないのが大変で、保健師さんに電話相談して教えてもらったことを試しても泣き止まず大変だったと言う声を聞いた。育児の方法はそれぞれだし、お子さんによっても個性があるのでいろんな方法を勉強する必要があると感じた。また、困っているお母さんを見捨てずフォローすることで虐待防止の活動につなげることが大切だと学んだ。

・話しかけると、自分から進んで話してくださるお母さんが多く、「話したい」お母さんが多いのだと感じた。助産師という専門職に話を聞いてもらうことで気持ちがすっきりしたり、自分の育児の方法について間違っていないと肯定してもらうことで、自分の子どもと自信を持って向き合えるきっかけになると考えた。話を聞くことは、虐待防止の基本であると感じたので、今後助産師として、対象者の話を聞くことを意識し、悲しい思いをするお母さんや子どもを減らすための一助となるよう頑張りたい。

・子どもケアセンターにこんなにもたくさんの母子が集まっていることに驚いた。母子同士で交流している様子も多く見られ、お互いの育児の悩みに共感し合いながら孤立しないような憩いの場が提供されていることは、オレンジリボン運動の視点からいっても大切なことだと考えた。

・実際に育児の悩みについてお話を聞いて、その子や家庭の環境によって多種多様な問題を抱えていることがわかり、その人の個別性にあった支援を提供するためには、背景をよく知るためのコミュニケーションが必要になると考えた。

・思っていたよりも、子どもにイヤイヤされても落ち着いて対処されていて、自分なりにどのように対応していこうか考えながら生活されていた。まずはその方の方法を受け止めてさらに快適に過ごせるように情報提供をしていくことが大切だと考えた。

・クレヨンパークでは、6~7名ほどの、1歳台の子どもをもつ母親にお話をした。それぞれで抱えている悩みが異なり、子どもの食事で悩まれている方、人見知りで悩まれている方、子どもの泣きに困っている方など、様々でした。皆さん、リーフレットの説明をしっかりと聞いて下さり、困ったら誰かに相談しようと言ってくくださる方が多かったです。子育て支援センターという場で歳の近い子を持つ母親同士で会話をし、必要な支援に結び付けてもらえることで、救われている母親も多いのではないかと感じた。

・オレンジリボン活動に参加して、幼児期のイヤイヤ期の説明や対応の例についてパンフレットを使って紹介した。実際に幼児期のお子さんのイヤイヤ期で悩んでいる母親と出会って、「自分の子どもだけど怪獣みたい、イライラします」などと何を考えているのか分からないことやずっと2人でいることに疲れてしまうことを理解した。子育て支援施設で、職員の方や同じような年齢の子を持つ母親と交流をもち、共感して受け止めてもらえること、2人きりの空間から解放されることができ、母親の心の休まる時間になるのだと考える。オレンジリボンの活動を通して、母親1人が抱え込まないで、追い詰められて虐待につながらないようにするべきだと思った。